慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	トマス・ジェファスンとアルブマール郡
Sub Title	Thomas Jefferson and Albemarle County
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1982
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.75, No.3 (1982. 6) ,p.321(93)- 334(106)
JaLC DOI	10.14991/001.19820601-0093
Abstract	
Notes	島崎隆夫教授退任記念特集号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19820601-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

トマス・ジェファスンとアルブマール郡

白井　厚

1. 独立革命とヴァジニア
2. アルブマール郡の形成
3. 初期の入植者たち
4. 父ピーター・ジェファスン
5. ジェファスンとアルブマール郡

1. 独立革命とヴァジニア

1607年，105人のイギリス人たちが James 川の北岸につくった Jamestown が，アメリカ大陸における植民地として初めて成功したので，ヴァジニアはアメリカ合州国の中で最古の歴史を持った州である。ヴァジニアに対する第一の特許状（1606年）において，この植民地に住む人は本国人と同様にすべての自由，権利および特権を享有する（第15条）と規定され，これが各植民地に広がったために，ヴァジニアはアメリカにおける自由の伝統の淵源でもあった。

しかし，1619年にジェイムズタウンでアメリカで最初の議会が開催されると，偶然にもまさにその地，そしてその年に，オランダ船がもたらした黒人奴隷20人が購入され，奴隷制度はこの国に不吉な影を落とし始めた。（議会主義と奴隷制は，その発生において双生児的である。）インディアンとの関係は，酋長の娘 Pocahontas と植民者 John Rolf との結婚物語で語られるような友好関係も多いが，植民者の数が増し侵略が拡大するにつれて，戦闘も行われ，ジェファスンが『ヴァジニア覚え書』の質問第6で紹介したクレサップ大佐によるインディアン虐殺とそれによる戦争のごとき例も見られ，白人は次第に彼らを駆逐したのである。

ロルフ夫妻の協力によってタバコの乾燥保存法が工夫されて以来，経済的にはタバコ栽培がヴァジニアの繁栄の基盤となり，年期奉公人と奴隷の労働に依存するプランテイション制が広がり，大プランターと小農の対立抗争（たとえば1676年の Nathaniel Bacon の反乱），そして奴隷問題が，南部の宿命となった。政治的には1624年にヴァジニアは王領直轄植民地となり，本国から総督が送られ，county 制がとられ，代議制が発達した。政治権力を独占したのはもちろんプランターたちで，その中から有能な人材が輩出し，特に建国期には大活躍している。文化的には，この地はイギリス本

国の影響が強く，イギリス国教会は種々の特権を持ち，大プランターたちは本国のジェントリィ風の生活にあこがれ，本国から家具や調度品を取り寄せ，競馬やチェスや音楽などを楽しんだ。特にピュアリタン革命によって本国の金持が移住し，いわゆる南部の保守層をこの地に形成した。しかし，もちろん本国の貴族制がそのまま移植されたわけではなく，イギリス的貴族主義と啓蒙思想は複雑にからみ合いつつ，ジェファスンの時代に至るのである。

独立への道においては，北部のマサチューセッツ植民地と呼応し，最大の植民地としてヴァジニアは先進的役割を果たした。

すなわち，1765 年には Patrick Henry の提案でヴァジニア議会は印紙法に反対するヴァジニア決議を行って本国の課税権を否定，この影響で Sons of Liberty という名の結社が生まれ，印紙法施行を妨害したりイギリス商品の不買運動を進めたりした。69年にはヴァジニア下院は George Mason 起草の決議を採択，非公式にイギリス商品不買協定を採択，73年にはヴァジニア議会は植民地間連絡委員会を組織，ボストン茶会事件後の懲罰法（1774年）に対しても各植民地の団結を呼びかけ，同年の大陸会議開催に大きな役割を果たした。75年には P. ヘンリィの“自由か死か”の演説が植民地人の決起をうながし，戦争となるや大プランター George Washington は大陸軍総司令官に任命されて軍を指導，ヴァジニア協議会は大陸会議代表に独立提案を指示，大陸会議ではヴァジニア代表 Richard Henry Lee が独立宣言採択動議を提出，ジェファスンが「宣言」を起草したのは周知のところである。

ヴァジニア東部のYorktownの勝利によって独立を達成するよりも前につくられたヴァジニア憲法は最初の成文憲法として大きな影響力を持ち，1787 年の合州国憲法制定に際しては主に James Madison が起草したヴァジニア案が基礎となった。こうしてヴァジニアは，いわゆる“建国の父”を多数輩出し，新憲法に基づく初期の大統領5人のうち，ウォシントン（Westmoreland 郡出身），ジェファスン（Albemarle 郡出身），マディスン（King George 郡出身），Monroe（Westmoreland 郡出身）と，4人までがヴァジニアの人で，いわゆる“ヴァジニア王朝”を形成したのである。

州内でジェファスンが手がけたヴァジニアの土地制度改革，信教自由法制定などは，独立達成後の先進的な改革として，他の州，さらには他の国にまで，大きな影響を与えた。

2. アルブマール郡の形成

現在のヴァジニア州の地形は，東は Chesapeake 湾と大西洋に面し，西部には Blue Ridge の山脈が背骨のように走り，その山麓から中央部にかけてなだらかな丘陵地帯となっている。Rapahanock 川，York 川，James 川などの川は西の山脈から東の海に向かって流れ，Washington, Fredericksburg, Richmondを南北に結ぶ線の東側は低地となっているので，この線はfall

line, 東側は Tidewater, 西側の丘陵地帯は Piedmont (または Piedmont Plateau), ブルー・リッジとその西にある Allegheny 山脈の間は Great Valley と，伝統的に呼ばれている。ピドモント丘陵は標高 100～300 m，ブルー・リッジの最高峰は 1,745 m でさして高くはないが，とかく大味なアメリカの諸州の中では，海岸，丘陵，山，谷が美しい景色をつくり，変化に富んだ州と言えるだろう。(Shenandoah は国立公園として有名。) 州の南部には化学・タバコ製造・繊維・食品・交通関係・木材・製紙・織物などの工場が点在し，海岸地帯の水産業，ピドモントの農業（タバコ・とうもろこし・小麦・じゃがいも・南京豆など）と牧畜業，山地の林業・鉱業，谷部の果物など，産業の種類も豊富である。

ヴァジニアの植民は，主にジェイムズ川をさかのぼって徐々に行われ，白人はジェイムズタウンを建設したのち川をつたわって西に進み，州都は 1699 年には Williamsburg へ，1779 年には Richmond へと移動，大動脈たるジェイムズ川の役割はますます重要となった。

入植が行われるにつれて，郡 (county) の制度がつくられ，一つの郡は人口が少ない間は広い面積を占めたが，人口増加に伴って分割され，新しい郡がつくられるのが普通である。アルブマール郡は，1727 年に Hanover 郡から分かれた Goochland 郡の一部に過ぎなかったが，次第に人口が増え1744年に分割が決められ，翌年2月4日にアルブマール郡が誕生した。しかもこれは，現在のアルブマール郡だけでなく，今の Nelson, Buckingham, Amherst, Fluvanna, Appomattox の各郡，および Campbell 郡の一部をも含んでいたのである。courthouse の所在地は，全体の中央部に近く，ジェイムズ川岸で水運の便が良い今の Scottsville[(1)] に置かれた。やがてまた人口増加に伴い，1761年と77年の2回にわたってアルブマール郡は分割され，約5分の1ほどの面積の地がアルブマール郡の名をとどめ，他の地域は別の郡となった。最初の分割の時にコートハウスは Charlottesville[(2)] に移転，これはこの地が新しいアルブマール郡のほぼ中央にあるという理由で，

注(1) シャーロッツヴィルの南約20マイル，ジェイムズ川の北岸に生まれた町で，1744 年に Edward Scott がこの地を購入したために Scott's Landing と呼ばれていた。ジェファスンの弟 Randolph の土地 Snowden は，川の南岸にあたる。郡の courthouse がシャーロッツヴィルに移ったのちも，この町はブルー・リッジへ通ずる交通の中継点として存続し，独立戦争の時は，旧コートハウスに貯えられた軍需品を守るために Lafayette が戦い，Cornwallis 軍の Tarleton をヨークタウンに追い帰した。以後19世紀前半にかけて，リッチモンド以西の要港，タバコ，穀物，小麦粉の取引き場所として栄えたが，南北戦争に際して1865年 Sheridan と Custer に率いられた1万人の北軍が来襲して水運の施設を破壊，またたびたび洪水の被害に遭ったことも災いして，町はさびれた。現在でも，1780 年 John Scott によって建てられた Mount Walla（ランドルフ・ジェファスンの孫 Peter Field Jefferson がのちにこの家を買った）や，19世紀初めの繁栄時代のいくつかの建築，教会を改造した Scottsville Museum などがある。この博物館の隣には James Turner Barclay 博士の家があり，彼は 1831年にモンティチェロを購入しそこで養蚕をやろうとしたが，失敗して5年後にこれを売却した。彼は Staunton の薬種商で，この地に来て隣に教会を建ててここで説教をし，また合州国造幣局の案出者であり，エルサレムに伝道し，*The City of the Great King* を書いている。この町には Chesapeake & Ohio 鉄道が通じているが，現在では貨物列車しか走っていない。スコッツヴィルについては Virginia Moore, *Scottsville on the James, an Informal History*, Charlottesville, 1969.

(2) アメリカの上院外交委員会は，アメリカ議会技術評価局技術評価委員会に，核戦争が起こった場合の影響について綜合的な研究を要請，評価委員会内のプロジェクト・チームは約1年の作業ののち議会に報告書を提出した。この中に，Nan Randoll, "Charlottesville: The Effects of Nuclear War, A Fictional Account" がある。これは，

シャーロッツヴィルは人為的に形成された町である。現在のアルブマール郡は，ピドモント高原の東端でブルー・リッジのふもとにあり，サウス・ウェスト山脈などいくつかの小山脈を含み，南の一角がわずかにジェイムズ川に接し，郡の中にはその支流である Rivanna 川，Hardware 川が流れている[3]だけで，山が多く交通は比較的不便で，開拓は早い方ではなかった。

植民地の地名には王侯貴族や政治家の名をつける習慣があったが，アルブマールという名は，当時の植民地総督 William Anne Keppel, second Earl of Albemarle(1702-1754，ジョージ一世と二世の時代に外交などで活躍した人物で，1737年にヴァジニア植民地の総督になったが，名目のみでアメリカに渡ったことはない）から取った。シャーロッツヴィルという名は，ジョージ三世の妻 Charlotte Sophia of Mecklenberg-Strelitz (1744-1818) から取った。ヴァジニアはもちろんサー・ウォルター・ローリィが処女女王エリザベス一世にちなんでつけた名で，本国の女王や王妃や総督の名を冠した地が反英抗争の中心となったのは，歴史の皮肉である。

（シャーロッツヴィルは，1871年に行政上アルブマール郡から独立した市となった。ただし本稿においてアルブマール郡という場合には，1777年から現在に至る郡の地域を指し，その中にシャーロッツヴィル市を含める。）

3. 初期の入植者たち

ヴァジニアにおけるインディアンの実態については，その記録が乏しいため，現在でもジェファスンの『ヴァジニア覚え書』の詳しい記述以上にはあまりわかっていないようである。生産や交通の便宜から考えて，おそらく白人入植のころにはインディアンたちはタイドウォターを中心に住み，ピドモントには少数が散在し，ヴァレイは狩猟場であって定住の例は少なく，西南部には少数が定住していたと考えられる。白人入植のころは全体で17,000名と言われ，狩猟中心の生産力ではそれ以上の人口を養いえず，特に冬期には食糧が欠乏し，白人進出以後はその狩猟場を狭められて，ジェファスンは62年間にインディアンの人口は3分の1に減少したと『ヴァジニア覚え書』で推定して[4]

4,000メガトンの水爆が撃ちこまれ，アメリカの大部分が壊滅したのに，シャーロッツヴィルは生き残ったと想定し，避難民たちの混乱を描いたフィクションである。この訳は，中林貞男・服部学『核兵器の脅威を語る——平和と生協運動』（日本生活協同組合連合会，1980）に収録され，また米国技術評価局編，西沢信正・高木仁三郎訳『米ソ核戦争が起ったら——上院へのレポート』（岩波書店，1981年）にも訳出されている。

注(3) ヴァジニアの川については，『ヴァジニア覚え書』の質問2に対するジェファスンの答えがあり，ジェイムズ川の航行はリッチモンド付近で滝のため中断されること，"リヴァナ川はサウス・ウエスト山脈と交わるまでの約22マイルにわたってカヌーおよび川舟（ペトー）による航行が可能である"こと，"またこの山脈を縫ってシャーロッツヴィル上流の分岐点までを航行用に改修するのは容易であろう"ということが示されている。T. Jefferson, *Notes on the State of Virginia*, ed. W. Peden (Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1955), p. 6. 中屋健一訳（岩波文庫，1972），p. 16. ただし，以下の引用においても訳文は必ずしも邦訳によらない。

(4) "彼らの歴史における悲しむべき結末は，1669年の人口調査から論ずることができよう。すなわち，ここで調査されている部族の人口は，62年間に以前の人口の約3分の1にまで減ってしまっているのである。火酒，天然痘，戦争などの要因に加え，主として自然が天然に生産するものを常食とする人びとにとっては，領地の縮小もまた恐るべき惨害をもたらしたのであった。" Ibid., pp. 93-6. 中屋訳，p. 176.

いるほどだ。

現在のアルブマール郡の地域には，墓の跡などの遺跡がいくつかあるので[5]，17世紀には Saponi 族という Monacan 族連合の一派が，今のスコッツヴィルや Morven[6] のあたりに定住していたと考えられている。しかし，タイドウォターの Powhatan 族の興隆によって追われたのか，この地に白人が到来した頃にはすでに定住をやめ，川を交通路に，丘を狩猟場に用いた程度で，白人との接触の記録は乏しく，周辺には Appomattox, Rappahannock, Roanoke, Shenandoah などインディアンの地名があるが，郡内にはインディアン系の名はほとんど残っていない。

白人到来の記録もやはり乏しいが，その最初は1716年の副総督 Alexander Spotswood と12人の探検隊と考えられている。彼らはイギリスの植民地を西へ拡大し，フランスの勢力と対抗するため，護衛兵，インディアンを伴ってウィリアムズバーグからブルー・リッジに挑み，Rapidan 川をたどって今の Germania から Swift Run へ至る道をつくり，さらにヴァレイにまで下った。この探検の成功によって，白人の西漸運動が推進され，アルブマール郡の北部はヴァレイに至る重要な通路となったのである。

以後白人の西漸運動は川をたどって徐々に進み，始めは狩猟小屋を建て，次第に定着したと思われる。（最初の移住は1727年といわれる。）入植者にとっては狩猟は特に重要な技術で，交換手段にはタバコと毛皮が用いられた。この地には鳥獣・魚が豊かで，そのために，郡内には鳥獣の名を冠した地名がいくつか見られる。この地は地価が安く，また免役租がかからなかったので，富者も貧者もこの地に土地を求めた。ただし富者の中には，開拓の危険を避けて overseer を先に派遣し，自らの定住は遅れた場合もある。定住者はやがてタバコ栽培を始め，川舟でタバコを下流に売りに行き，良い値で売れれば豊かになることができた。

ここで，特にフォール・ラインの持つ経済的意味を考える必要があろう。タイドウォター地域は水運の便が良いが，フォール・ラインのために船はピドモント地域に直行できず，フォール・ラインで小型の舟に商品を積み換えてから川をさかのぼったために，商品は高価になった。タイドウォターは大西洋経済圏に属するが，フォール・ラインはその境界を形成し，その西のピドモントはその圏外である。そこではプランターといえどもタイドウォターにおけるようにイギリスから商品を購入することは少なく，自ら生産にも従事し，必要なものは奴隷を指導してつくらせ，質素な生活をしプランテイション内で自給自足に近い経済を営んだ。プランターは，生活の必要から農業・工

注(5) ジェファスンは，リヴァナ川第一の分岐点の約2マイル上流でインディアンの墓を発掘調査している。Jefferson, p. 98. 訳, pp. 180–2.

(6) モーヴァンは Carter の所有地から 1796年につくられたプランテイションで，近くに大きなインディアンの村の跡があるところから，もとの名を Indian Camp と言った。ジェファスンの友人で彼が駐仏公使の時にその秘書をした William Short 大佐がこれを買ったが，後に駐オランダ，スペイン大使となり，不在がちだったので，これを1813年に David Higginbotham に売った。1820年ごろ，彼はジェファスンの設計にもとづいてここに煉瓦建ての家を建築した。

業・商取引・軍事・政治・法律・医療・宗教などの専門知識を持っている人が多く，ジェファスンのような万能人を輩出する可能性が強かった。また政治的にもロンドンやウィリアムズバーグに依存する必要は少なく，開拓民と接するためデモクラティック[7]で，この郡が独立革命の一拠点となったのは不思議ではない。

周辺の白人の動きを見ると，1734年に Michael Woods と William Wallace がスコットランド系アイアランド人とドイツ人の移民を率いてシェナンドーアの谷に定着し，アルブマール郡に西北から影響を与えた。ヴァレイの北部はイギリス人が主だが，中部には，ペンスィルヴェイニア・ダッチと誤称されたドイツ人たちが多い。彼らは勤勉で質素，土を消耗する企業者型のプランターと違って家畜によって土を肥やし，輪作で穀物をつくった。ドイツ式の住居，家畜小屋をつくり，政治には無関心で日常はドイツ語を話し，団結が強かった。Staunton の南部に住んだのは Scotch-Irish で，勇敢，冒険好き，狩がうまく独立心に富み，開拓を進めた。自由を求めるために政治的関心が強く，タイドウォターのプランターの干渉に抗し，ディモクラスィの源泉となっている。羊を飼って衣類も自給し，穀物，家畜，ウイスキィなどをフィラデルフィアまで運んで生活した。

シェナンドーアの谷は，今日でも納屋の形などにその伝統をとどめるが，数世代のうちに melting-pot として自営農中心の独自の文化を形成した。これは奴隷制にもとづく企業者型プランテイションの文化とは異なるものであり，自由・独立の気風が強く，弁護士とし彼らと交わったジェファスンにも影響を与えている。フランスの勢力に対する緩衝地帯という意味からも，ヴァレイの住民には大幅な自由が与えられていた。

アルブマール郡の開拓は，その東端，つまりサウス・ウェスト山系の東側から始められ，今の Cismont の Grace Church の近くに，イギリス国教会の Mountain Chapel[8] が 1724 年に建てられた頃が，始まりのようである。以後主な土地所有（grant）の記録は次の通り[9]。

1727	George Hoomes, Jr.	3100 エイカ	Chestnut 山脈のそば
1727	Nicholas Meriwether	13762	Chestnut 山脈のそば
1729	Dr. George Nicholas	2600	ジェイムズ川左岸
1730	Allen Howard	400	ジェイムズ川岸
1730	John Carter	9350	カーター山
1730	Charles Hudson	2000	ハードウェア川両岸

注（7）ジェファスンの思想形成については，拙稿「トマス・ジェファスンの経済思想」(1)，『三田学会雑誌』69 巻8号，1976年12月。

（8）1750 年以前の唯一の教会であるマウンテン・チャペルの所在地について Charles Wilder Watts は，Deed from William Randolph, Jr. to William Stith (*Goochland County Deed Book*, III, p. 277)から，Three Notched Road付近と確定し，その論文はヴァジニア大学図書館にある。今のグレイス教会は石造りで1850年ごろ造られたが，火事で一部が焼け，1896年に再建された。

（9）Cf. E. Woods, *Albemarle County in Virginia*, chap. I ; Moore, Part I, chap. 2.

1730～70	Major Thomas Carr	5000	リヴァナ川岸
1732	Edward Scott		スコッツヴィル
1732	Joel Terrell, David Lewis		Lewis Mountain
1735	Col. Peter Jefferson	1000	Tufton, Monticello
	John Henry	1250	Early
	Abraham Lewis		大学付近
1737	William Taylor		Charlottesville

彼らは大部分が東部の大地主で，土地の取得は投機および子供のための財産形成を目的とし，プランテイションを経営した。初めは監督を派遣して経営に当らせた場合も次第にプランター自身も郡の東部に移住し，自分のプランテイションの中心に家を建て，隣家とは10数マイルを隔てるという典型的な散村をつくった。先に述べたように生活必需品を自給したので，プランターは，タバコのほかに麦やとうもろこし，野菜なども栽培し，家内工業を営み，水車小屋を建てて製粉で利益を得たり，商業，金融，土地投機，飲食店・旅館経営なども行った。そして多くは測量師，医師，説教師，弁護士などの専門職を持ち，支配階級として郡や州の政治にかかわり，軍人や探検家として対外的にも活動した。

こうしたプランターたちは，タイドウォターの大プランターほど豊かではないが，1,000 エイカ以上の土地，20人以上の奴隷を所有し，多角経営で利益を収めた。奴隷一人に50エイカ，20人で1,000エイカの土地が経済的には適当な規模と考えられ，5,000エイカ以上の所有者は大プランターと言ってよいであろう。プランターの下には100～1,000エイカの土地と20人未満の奴隷を有する中農がおり，その下には，入植者に割当てられた50エイカ程度の土地しかなく奴隷も持たぬ貧農がいた。独立革命前には，郡内の人口は約5,000人，うち奴隷は40%で2,000人，他にわずかの自由黒人がいた。白人人口の4分の1近くは貧農，70%は中農（5人未満の奴隷，400エイカ以下の土地所有者が大部分），1,000エイカ以上のプランターは白人の5%に過ぎない。この5%が，郡の経済，政治，司法，軍事の権力を独占し，また革命前夜の一切の情報を握り，革命の過程で強力な指導者を出すこととなる。

4. 父ピーター・ジェファスン

ジェファスン家はアメリカにおいては古い歴史を有し[(10)]，トマス・ジェファスンの曽祖父 Thomas

注(10) ジェファスン家は1612年にヴァジニアに移住し，1619年にジェイムズタウンで最初の植民地議会を構成した22人の中にその名前がある (Sarah N. Randolph, *The Domestic Life of Thomas Jefferson*, compiled from family letters and reminiscences by his great-granddaughter, third edition, 1967, p. 6.) と言われるが，確認されていない。

Jefferson I (?-1697) は，リッチモンドの東にある Curls というところ（今の Chesterfield 郡，当時は Henrico 郡の一部）に住む自営農であったが，狩猟，測量なども行ない，土地財産を増し，妻の財産も得て，数人の奴隷も持つようになった。祖父 Thomas Jefferson II (1677-1731) は，この地でプランターに上昇してジェントルマンと呼ばれ，民兵大尉で，ジェントリィの象徴たる競馬馬も持ち，若くしてヘンライコ郡の gentlemen justice の一人となり20年もその職にあった。プランターたちはみな西の処女地に関心を持っていたが，彼もリッチモンドの西，ジェイムズ川上流に Fine Creek という数百エイカの地を得た。父 Peter Jefferson (1707-57) は，この地を相続して住み，すでにジェントリィの一人であって，完全な self-made man ではない。だが野心に燃え，強い精神力の持主で，家庭の不幸のために正規の教育を受けられなかったので，自分で測量技術を学び，測量師，地図製作者としても成功した。また名門 Randolph[(11)] 家の娘と結婚することによって社会的信用を高め，事業にも成功して財産を増し，グーチランド郡の行政官，治安官などの要職を歴任している。ジェファスンの表現によれば，

> "私の父は全く教育を受けなかったが，強い心と正しい判断力を持ち，知識欲に燃え，読書によって勉強し，William and Mary 大学の数学教授 Joshua Fry と共に，Byrd 大佐が始めたヴァジニアとノース・カロライナの境界線確定の仕事に選ばれるほどになった。そしてのちには，Smith 大尉が想像図を描いたことしかなかったヴァジニアの地図を，同じフライ氏と初めて作成する仕事に従事した。……彼は，1737年頃，今私が住んでいる所に3番目か4番目に入植した。[(12)]"

ジェファスンは父の成功と先駆性を誇っているが，確かにピーターは，アルブマール郡の開拓者として重要な人物と言えるだろう。1736年に購入したシャドウェルは，当時はまだ未開に近い状態であり，近隣には3～4人の住人しかなく，彼はそこを根拠に事業を進め，アルブマール郡設立後最初の郡会議に出席，以後最初の行政官，民兵中佐（指揮官はフライ），郡選出の植民地議会議員 (1755, 1756) など，郡の政治にも重要な役割を果たしている。1751年にフライと共にヴァジニアの地図を作成した頃には，郡で最も地位財産を得た人の一人であった。

注(11) ランドルフ家はジェファスン家と密接な関係があるので，その概略を述べると，最初の William Randolph は 1673 年頃イギリスからヴァジニアに移り，ジェイムズ川南岸の Turkey Island と呼ばれるところに住んだ。1705年までに彼はヘンライコ郡のみで1万エイカの地を領有，King's Attorney，民兵中佐などの職をつとめ，その土地を7人の息子たちに分け与えた。長男 William がターキィ島を，次男 Thomas が Tuckahoe を継ぎ，この次男の子が親友のウィリアムで，その孫がジェファスンの娘 Martha と結婚した Thomas Mann Randolph（ヴァジニア州知事）である。またウィリアムの妹の孫には，最高裁判所長官 John Marshall がいる。3男 Isham の娘がピーター・ジェファスンの妻 Jane であり，ほかに Rebert E. Lee なども子孫の中に数えられ，ランドルフ家は単にヴァジニアの名門と言われるのみならず，アメリカ史上で最も傑出した人材を輩出したと言われる。ジェインの甥はジェファスンの妹と，ジェインの姪はジェファスンの弟と結婚した。

(12) *Autobiography of Thomas Jefferson*, with an Introduction by Dumas Malone (Capricorn Books, N. Y.), pp. 19-20. Malone によると，1737年よりは後に入植したらしい。Dumas Malone, *Jefferson and his Time*, vol. I, *Jefferson the Virginian* (Boston: Little, Brown & Co, 1948), p. 18.

ピーターは先駆者ではあるが，決していわゆるフロンティア農民ではなく，大プランター，奴隷所有者であったことは，強調されねばならない。彼の所有地は，ほぼ次のようであったと考えられている。(13)

Rivanna estate（ジェファスンが相続）

1735年取得	1000エイカ	モンティチェロを含む土地
1736	200	シャドウェル
1741	200	シャドウェル
1740	150	Portobello（リヴァナ川南岸）
1746	650	Pantops（リヴァナ川北岸）
1755	150	Tufton（リヴァナ川南岸）
?	300	Pouncey's
合計	2650	

Fluvanna estate（弟 Randolph が大部分を相続）

1754	2050	Snowden（ジェイムズ川南岸）

Cumberland estate（祖父からの土地 Fine Creek でジェファスンが相続）
Bedford estate（ジェファスンが相続）
} 2800エイカ

以上によって，ピーターは死去の時総計7500エイカの土地を持っていたことになる。また，1759年には Martin Dowson（スノウデン），Joseph Dawson, Fored Gilliam（シャドウェル）の3人の奴隷監督を使っており，その上に管理責任者 John Moore がいた。ジェファスンは20人の奴隷を相続しており，弟の相続分を考えると，ピーターは約40人程度の奴隷を持っていたと考えられる。

そこでジェファスン家は，三代にわたって次第に上昇したプランターで，特に父ピーターはその実力によってアルブマール郡の支配階級に入り，ジェファスンはこの父から，支配階級の一員としての便宜（経済力，特に高等教育，教養，社交，指導者としての訓練）と，上昇するプランターの活力を得たことであろう。当時のアルブマール郡は，すでにフロンティアではないが，(14) プランターの居住

注 (13) Malone, Vol. I, Appendix II.

(14) "当時ヴァジニアでは人口の多い場所はなかった。……この自然の広大な状景は，トマス・ジェファスンの心に影響を与えずにはいなかった。それは，彼の心の豊かさを育んだ。その上に，この社会は，後の世代の人が先ず想像するところよりは，全体としてフロンティアに近かった。だが，ジェファスンは少年時代にアルブマールにずっと住んでいたわけではないし，この地域を最も良く知ったのは，定住地の境界がはるかに先へ行ってしまったあとのことである。彼は，人口の少ない国に親しんでいたが，フロンティアを経験によっては知らなかった。彼はいつも荒野を意識していたが，物理的な意味で探険家ではなかった。" Ibid., p. 4. 近年の松本重治氏によると一転し，"フランクリンが都市に生まれ都市に育ったのに反し，トマス・ジェファソンは辺境（フロンティア）の子であった。……彼の父ピーター・ジェファソンは，長男でなかったため遺産をもらえなかったが，若い時から土地測量師として堅忍力行を続け，自己の運命の開拓者としての生涯を生き抜いた人であった。……辺境開拓者の子であったトマスには，農耕のための土地に対する関心と，開拓者生活の自由と自治とがほとんど生まれつきのものであった。それは後年，政治家ジェファソンとなってからの活動においても，その主観的因子となっている。" 松本重治「アメリカ民主主義思想の原型」，『世界の名著』33，フランクリン，ジェファソン，マディソン，トクヴィル所収，中央公論社，1970, p. 30. 松本氏は，父の相続財産を抹殺し，トマスを辺境の子に仕立て，プランターと小農との階級闘争，奴隷労働の搾取に目をつぶっている。（トマスの相続財産については，Malone, p. 10.）

地としては西端にあり，奴隷制度の上に築かれたプランターの支配が，次第に自然と融け合う比較的単純な社会であった。ジェファスンは，奴隷労働から搾り出した富の恩恵に浴しつつ，なおフロンティア的な気風[15]をも呼吸しえたといえる。

シャドウェルは，今のシャーロッツヴィルから3マイル東，リヴァナ川の北にあり，サウス・ウエスト山脈の切れ目からは遠くブルー・リッジの峯を望み，1マイル半の距離をへだててモンティチェロの丘を眼の前に見る景色のよいところである。ピーターは200エイカの土地を，妻のいとこで親友の William Randolph から得たが，当時は土地が安く，また彼は非常に寛大な友人で，ウィリアムズバーグの Raleigh Tavern の Henry Wetherburn がつくったアラック酒の飲料パンチ9ガロンとこの土地を交換したと伝えられる。(後にさらに200エイカの土地を買い足した時に全部の代金を支払った。) このパンチの容器は，多分17 世紀の後半にヴァジニアに到来した有田焼（伊万里）で，その後ヴァジニア出身の9代大統領 William Henry Harrison の家に属し，彼はこの鉢をホワイト・ハウスに持って行き公式の席で用いた。23代大統領 Benjamin Harrison もこの例にならっている。トマス・ジェファスン出生の地が，遠く日本の焼物が一役買って購われたことはわれわれにとって興味深い[16]。

だがジェファスンは，シャドウェルに長く住むことにはならなかった。2歳の時ウィリアム・ランドルフが死に，その遺言によって父ピーターは3人の遺児の後見を頼まれたため，家族を連れて，Tuchahoe に移動，一家は1752年にシャドウェルに戻り，ピーターは57年この地で没した。ジェファスンは父の死後もウィリアム・アンド・メアリ大学入学などでこの地に戻らぬことが多く，

注 (15) "この点にかんして数えられるものは，この自然の景観に対する情緒的な反応，内陸地域の自由と素朴さに対する彼の気特，そして特にヴァジニアの開拓と探険に参加しているという意識である。この最後の点は，父を通じてであった。父はヴァジニアの西方移住の先兵であった――いつも息子の自慢の種であった――ばかりでなく，Alleghenie を抜け，William Byrd が数年前に始めた North Carolina との境界をさらに確定するために，南西ヴァジニアの地図にない荒野を測量した。そして William and Mary 大学数学教授 Joshua Fry と共に探険して，この州についての最初の正確な地図を作成した。これらはすべて，ジェファスンが子供の時に行なわれたのである。彼の冒険心は，これによって刺戟されたに違いない。またアルブマール郡におけるいくつかのことも，西方に対する想像力をかきたてたようである。ピーター・ジェファスンの友だちで医者である隣人 Thomas Walker 博士もまた，広い山岳地帯を探険し，後には西部とインディアンに関するジェファスンの指南役となった。ウォーカーは，ジェファスンの父も株主であった西南ヴァジニアの投機会社 Loyal Company の指導者であった。アメリカ革命期の北西部征服者 George Rogers Clark と，後には太平洋岸まで至った Meriwether Lewis は，アルブマール郡の生まれである。クラークの兄弟で後にルイスの協力者となった William Clark は，ここで生まれなかったというだけで，彼らはみな，このアルブマールの最も有名な息子（ジェファスンのこと――白井注）の生活の中で特に異彩を放っていた。彼は開拓者でも探険家でもなかったが，小さな時から彼は西部にあこがれていたのである。西部は偉大な自然として描かれた。彼自身は，彼の生まれ故郷を賛美してやまなかったように，文明と野蛮の中間にある人間的な状態を好んだけれども，広大な自然は彼にとっては絶ちがたい魅力であった。そして，彼の少年時代の，甘く小さく，よく手入れされしかも持味が損われず，限りなく美しい自然の世界は，あらゆる彼の価値を彩った環境と人間との関係という意識を強めた。この世界の中に彼が発見した開放性，自由，素朴さが，成人してのちのディモクラティックな倫理へと彼を押しやった。" Merrill D. Peterson, *Thomas Jefferson and the New Nation, A Biography* (New York: Oxford Univ. Press, 1970), pp. 5–6.

(16) 拙著『アメリカ……教育・女性・歴史』(長崎出版，1980), pp. 109–110.

1770年，この生家が火事で焼け，モンティチェロに移った。その時，彼の蔵書，書類なども焼失した。

シャドウェル一帯は，ジェファスン父子に関係が深い場所が多い。ジェファスンの生家[17]があった場所には，1961年に Jefferson Birthplace Memorial Park Commission が木造2階建6室の生家を復元したことがあったが，のち1963年に Thomas Jefferson Memorial Foundation がこの地を購入した時に，復元は正確なものではないとしてこの家を撤去した。今は250号線という街道の南側に芝草におおわれた小高い丘があり，その一角に "Shadwell Estate. Peter Jefferson acquired the land in 1735, and built the house about 1737, Thomas Jefferson was born here, April 13, 1743. He lived here, 1743-1745, and 1752-1770. The house burned in 1770, and Jefferson then moved to Monticello." と書かれた Conservation & Development Commission が1928年につくった標識が立っている。(実際には土地が買われたのは1736年，またジェファスンは1752年からここに住んではいない。このような標識の誤りは他にも沢山ある。) 周辺には柵がめぐらされ，一般には中へ入れない。閉じられた門から一筋の道が丘の上に通じ，草原には点々と立木が見られるのみである。

5. ジェファスンとアルブマール郡

建国の経緯からしてもアメリカでは地方分権の意識が強く，個人は出身の州や郡に強い愛郷心と深い関係を持っていることが多い。特にジェファスンは，ヴァジニアに対していかに深い知識と愛着を持っていたかは，唯一の著書と言うべき『ヴァジニア覚え書』を見れば明らかである。のみならず彼は，とりわけ故郷アルブマール郡と特に強い関係を持っていた。その理由は，彼の時代においてこの郡がプランターの最西端にあって開拓民とも接するという特殊な位置にあったこと，従って住民の気質は進歩的で，独立運動の一拠点となっていたこと，風光明媚で非常に魅力的な土地であったことなど，この郡の客観的な特徴にもよろうが，ジェファスンにとっては，次の点で著しいつながりがあった。

1 出生，結婚，死去の地というように，彼の私生活はこの郡を中心としていた。タカホーへの転居，大学入学，植民地議会議員・大陸会議議員・ヴァジニア州知事・駐仏公使・国務長官・副大統領・大統領という公職などのため不在がちだったとはいえ，彼は任が終れば帰郷してこの地の住民に常に暖く迎えら[18]れ，この地で生活したのである。特に晩年はここで余生を過ごしたし，子供や親

注 (17) 生家の間取図（父ピーターの書き込みがある）は，Jefferson Coolidge Collection の中に含まれている。
(18) たとえば大統領の任期を終え帰郷した1809年4月3日，郡民の歓迎に対する答えとして "To the Inhabitants of Albemarle County in Virginia" を書いて喜びを表明している。

せきも郡内に居を構えた人が多い。

2　彼の天職は農業であって，この郡を中心にプランターとして生活した。彼がいかにこの地を愛し，農業に執念を燃やしたかは，彼の『園芸記録』『農場記録』によってその一端を知ることができる。また農業技術改善につとめ，郡の人たちと Albemarle Agricultural Society を設立，その中心人物となって広く農業知識の普及につとめた。(19)

3　郡の裁判所で弁護士として働き，また，彼の政界進出は郡選出の植民地議会議員を出発点としており，この郡は父ピーター以来の彼の選挙区として重要である。独立に先立って彼はアルブマール委員会の一員として活躍，1774年の強圧法以後，郡に帰って6月1日の祈りの日を組織，(20) さらに Resolutions of the Freeholders of Albemarle County (21) を起草，その中で本国議会の支配権を否定し，自然権と法的権利を擁護，マサチューセッツ支援を主張し，これは7月26日に決議されて大きな影響を持つこととなった。

また，1776年6月のヴァジニア憲法決定に対しては，大陸会議に出ていたジェファスンも草案を送ったもののウィリアムズバーグではこれが容れられなかった。この時アルブマールの多数の市民たちも，この憲法の反デモクラティックな点を批判し，革新的な立場を示している。(22)

4　独立戦争に際しては，郡は，Charles Lewis, George Gilmer, George Rogers Clark らの指導者を輩出し，ジェファスンを支援した。彼らはプランターだが，この地では本国との結び付きは弱く，一般農民との接触が多いので，急進派の指導者となり，独立宣言に熱狂して建国に協力したのである。(Thomas Meriwether のような保守派の大地主も少数あり，Albemarle Toriesと呼ばれた。)

また一般の郡民も，総督 Dunmore に抗議する民兵 (Militia) のウィリアムズバーグ進軍 (1775年) に加わり，また郡民の義勇軍152名は直接戦闘，特にラファイエットの作戦に参加している。その他郡内では，Saratoga の戦で捕虜となったドイツ兵とイギリス兵約4,000人の収容 (1779年から2年間)，Cornwallis 軍のヴァジニア侵入による州議会移動，Tarleton 軍襲来，民兵大尉 Jack Jouett のモンティチェロへの通報，モンティチェロ占領などの事件があった。

郡の決議によって郡の代表として新しく構成される協議会に参加する筈であったジェファスンは，ウィリアムズバーグに行く途中病気になり目的を果たさなかったが，そこで提案すべく書いたのが「イギリス領アメリカの諸権利概観」である。これは独立宣言の布石として重要な文書だが，郡の急進的な雰囲気を反映していると言えよう。

5　彼は啓蒙思想家として教育に情熱を抱き，教育普及法案などを発表したが，晩年は大学建設

注 (19) 農業者としてのジェファスンについては，拙稿「トマス・ジェファスンの経済思想(1)」，『三田学会雑誌』69巻8号（1976年12月）。

(20) *Autobiography of Thomas Jefferson*, pp. 24–5.

(21) *The Papers of Thomas Jefferson* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1950), Vol. I, pp. 117–8.

(22) Peterson, p. 103.

に意欲を燃やし，1814年には郡内にセントラル・カレッジを設立する委員会の委員長となり，結局シャーロッツヴィルに州立のヴァジニア大学を建設することとなった。（1819年州法により設立，25年開校）。大学の場所には，健康な土地，近隣の郡が肥沃な土地としてレキシントン，スタウントンとシャーロッツヴィルが候補となったが，州の白人人口の分布の中心となるために現在地が選ばれたとある。[23]

彼はこの大学の建築設計まで行い，建設工事を監督し，初代総長にもなって，この創立者たることを墓石に刻ませたのである。

6　建築家としてのジェファスンは，大学などの郡内の建築設計をいくつかひき受け，郡の景観を整えて今日にまで残した。特に彼の住居 Monticello は，40年の歳月を注いで完成した彼の執念の作で18, 19世紀にかけてのアメリカの代表的な建築である。自然の静けさと眺望を求めた山上建築であり，台所，倉庫，馬小屋などの付属建築物を統合してU字型の地下および半地下室に配列し，パラディオの古典様式とフランス建築の影響を受けた優美な姿は，今日もそのまま保存されている。

そのほか郡内のジェファスンが設計した建築には，The Peter Carr House, Farmington, Christ Church（消滅），大統領 James Monroe 邸 Ash Lawn などがあり，[24] 彼の建築におけるイメイジを今日に伝えている。

7　ジェファスンの住居と大学という二つの核を得て特に，この郡は多くの政治家，外交官，学者，探検家などの人材を生み，またその居住地となった。ジェファスンをめぐる人脈の歴史とその影響は，今日にまで及んでいる。

かくてアルブマール郡は，ジェファスンを生んだことによって，アメリカ全国に無数とも言える郡の中でも，最も精彩を示す郡となった。ジェファスンは建国期の郡の歴史に巨大な足跡を残したし，郡もまたジェファスンの思想と行動に少なからぬ影響を与えた。ジェファスンによれば，郡は誇るべき“合衆国のエデン”であり，彼はその中心部，モンティチェロの山腹に，自らデザインした墓石の下に今は眠っている。

*　　*　　*

郡の歴史についての文献は次の通り。

Woods, Rev. Edgar. *Jefferson's Albemarle*, 1941.

Rawlings, Mary. *The Albemarle of Other Days*, 1925.

_____. *Ante-Bellum Albemarle*, 1935.

注 (23) cf. The Rockfish Gap Report, 1818. ジェファスンの筆になるもので，真野宮雄訳が『アメリカ独立期教育論』（明治図書，1971）に含まれている。

(24) Desmond Guinness & Julius Trousdale Sadler, Jr., *Mr. Jefferson, Architect* (N. Y.: The Viking Press, 1973).

_____. *Early Charlottesville: Recollections of James Alexander, 1828-1874*, 1942.

_____. *Historical Guide to Old Charlottesville*, 1958.

St. Claire, Emily E. *Beautiful and Historic Albemarle*, 1932.

新しいものとしては，

Woods, Rev. Edgar. *Albemarle County in Virginia.* Harrisonburg, Virginia: C. J. Carrier Company, 1972.（ただしこれは新版であって，Preface の年は1900年となっている）

Moore, John Hammond. *Albemarle, Jefferson's County, 1727-1976.* Published for the *Albemarle County Historical Society.* Charlottesville, Virginia: University Press of Virginia, 1976.

後者は536ページの大冊で，私はそのタイプ原稿の段階から読み，得るところが大きかった。そのほかこの郡の地方史でヴァジニア大学に提出された博士・修士の学位論文もいくつかある。雑誌の *William and Mary Quarterly* (The Institute of Early American History and Culture), *The Virginia Magazine of History and Biography* (Virginia Historical Society, Richmond), *The Magazine of Albemarle County History* (Albemarle County Historical Society) などには，有益な論文が多い。

ジェファスン関係の文献，ヴァジニア大学史にはこの郡についての記述が多く，また郡史の原資料は，ヴァジニア州図書館，アルブマール郡歴史協会，スコッツヴィル博物館およびヴァジニア大学図書館が所蔵している。

（経済学部教授）